

No.84

2000・11

土佐の自然

発行 高知県文化環境部
環境保全課
高知市丸の内2-4-1
TEL 8 2 3-9 6 8 5
題字 橋本大二郎
印刷 共和印刷株式会社



空から見た三原村

写真提供：三原村

目次

◇シリーズ

おらんくの自然
—その38—三原村編

三原村の自然

下村 利彦

三原村の植生と植物相

澤良木庄一

三原村の地形と地質

川澤 啓三

三原村の昆虫

別府 隆守

三原村の野鳥

小林 靖英

植物アラカルト

山脇 哲臣

◇シリーズ

鎮守の森
—その六十四—

山脇 哲臣

三原村の自然

三原村文化財保護審議会委員 下村 利彦

(みはらというところ)

『三原村は、中村・宿毛・土佐清水の三市に囲まれた海拔200m内外の高原盆地、あたかも伏せた茶碗の尻のような面積85km²ほどの村である。村を知る人たちが「高高原」（たかまがはら）とか「幡多のチベット」などというのは、ともに三原の土地柄をよく言い表わしたものである。』と、これは村出身の故寺尾茂先生が、その著「方言と風土」に述べられた言葉である。

高高原とかチベットの比喩は現在では通用しないでありましょうが、四方を険しい山脈に遮られた高原の山里は周辺との交流も少なく、数箇所の縄文遺跡や、中世以降の遺跡や伝承は残るが往古の三原郷の姿そのまま、明治22年（1889年）の町村制施行にも、藩政時代の三原郷の姿のまま、旧十二ヶ村が合併、昭和28年の町村合併促進法の際も隣接町村との間で協議はしたが相手方はそれぞれ三市に合併、独立を保ったと言うか、取り残されたと言うか、戦後4,000人あった人口は現在2,000人を割っている。

この周辺から隔絶した地理的条件と歴史の中で形成された文化のなかで培われた村民性、いわゆる「三原的なもの」の功罪を継承して1,900余名が住む。



三原村中心部 写真提供：三原村

海岸線は勿論なく、国道もなければ鉄道も通らない、国や県の施設は、特定郵便局と巡査駐在所で二つあった営林署の担当区事務所も今は無い。

“みはら”の名は応徳2年（1085）の安芸文書にあり、正に“文化財的”な村ではあろう。

位置と地勢

県の西南部、県都高知市から陸路153km、東西14.4km南北9.5kmで面積85.19km²である。

南は主峰「今ノ山」864.6mの山系を境に、土佐清水市に接し、北は主峰「貝ヶ森」454.6mの貝ヶ森山系が東西に延びて中村・宿毛の両市と境して、海拔ゼロメートルの中筋地溝帯に急傾斜する。

この両山系から内方に延びた数多くの支脈の間の溪谷に耕地を拓いて各集落を形成する。



宮ノ川公会堂付近より今ノ山を望む

村の中央部の標高は143m、土佐くろしお鉄道宿毛市平田駅へ9km、隣接三市の中心の位置にあるが三市間ではこの村を経由することなく連絡している。県道は村内東西南北2線通じてはいるが二車線は中央部のみで大部分は旧規格道である。

地形と河川

南方の主峰今ノ山をはじめ周囲を450m以上の褶曲に富む尾根に囲まれ、これが内方に向って多くの支脈を発し、地域を山地で満たし山地率86%である。地域の殆んどの中小河川を合わせて南流し土佐清水市下の加江港で太平洋に注ぐ2級河川「下ノ加江川」は今ノ山を源流域に村の西部から皆尾川となって東流して南部の下長谷地区に達する。北部からの宮ノ川が東部からの長谷川を合して南流して下ノ加江川に合流して太平洋に出る。

下ノ加江川と三原川

高知県河川水系表では下ノ加江川であるが平凡社「高知県の地名」では「三原川」（下ノ加江川）であり、地域では三原川が通称となっている。なお、水系を異にする小河川に村の西部、下切小黒山を発した伊与野川が西流して宿毛湾に注ぎ、中

央北部の只ヶ森山系を源流とする清水川は、中筋川ダムを經由して宿毛市域へ北流し中筋川となって東流して四万十川に合流、また村の東端成山集落を源とする市野々川、市ノ瀬川は南流して下ノ加江川河口近くで合流する。

これら大小河川が急傾斜台地を流れ、夏季の多雨と台風の常襲と相俟って土壌の流亡が烈しく沃土の堆積が乏しい。降霜積雪共に少なく年間平均気温は15.3℃である。

三原百景



H.12. 7.23 清流まつり



清く美しい流れ



芽ぶきのシイ



水面に映える岸ツツジ



造成地



牧場

三原村の植生と植物相

土佐植物研究会 澤良木庄一

高知県幡多郡三原村は、県西南部に位置し、西に宿毛市、北に中村市、東から西へ土佐清水市という三市に囲まれている。また三原村は、南側を今ノ山(864.6m)を中心とした山地に、北側を貝ヶ森(454.6m)を中心とした山地に囲まれていて、この囲みの中に標高200mの高原性の盆地、三原村ができあがっている。そしてこの盆地の中を、中小の河川が潤している。即ち、盆地の中央部から袖ノ木川、長谷川、宮ノ川が川の流れを発し、東流して下ノ加江川に合流し、蛇行をくり返しながら、太平洋に注ぐ。またこの盆地に発する川の一部は、北流して中筋川の源流となり、西流して伊与野川となる。

このように山と川で織りなす三原村の自然は、県内でも屈指の植物の宝庫となり、村の花、カンランをはじめ、多様な植物種を育む四季折々の多彩な里山を形成している。

主な森林植生は、スギ・ヒノキ植林が大部分を占め、部分的にシイ・カシ萌芽林が散在し、一部には自然林のモミ・ツガ林やカシ林などの分布が見られる。

1. 今ノ山の植生

今ノ山(864.6m)は、四国西南部に於ける最高峰で、山頂に一等三角点がある。また航空標識のためのレーダー施設があり、このために、かつての自然林の景観が、一部損傷を受けている。しかし三原村の自然植生を代表するのは、やはり今ノ山に残る風景林の景観であろう。今ノ山の山頂付近に残る植生は、シイ・カシ林が主で、自然林では、ウラジロガシ・サカキ群集に区分される群落である。群落の組成は、高木層や亜高木層に、モミ、ツガ、アカガシ、ウラジロガシ、ヒメシャラ、サカキ、ヤブツバキ、ヤマザクラ、シキミ、アセビなどが出現して林冠を形成し、植被率70~90%。低木層はハイノキが優占する。また草本層には、シキミ、ヒサカキ、アセビ、ハイノキ、モミ、ウラジロガシ、ヤブニッケイなどの幼木が生育し、森林組成の安定した様子がうかがえる。その他林床には、キジノオシダ、トウゲシバ、シュスラン、カンアオイ属、ヤブコウジ、ツルコウジなどが見られる。また林床の腐葉土の上を覆うようにして、ヒノキゴケの繊細な葉の集団が、萌黄色のじゅう

たんを敷きつめている。この森林(ウラジロガシ・サカキ群集)は、暖温帯林のやや上部(推移帯)の森林として、今ノ山の山頂付近と、尾根筋を越えた南側斜面(土佐清水市)の一部に分布する。



今ノ山のシイ・カシ林

スタジイ、アカガシ、ヤブツバキ、ヤブニッケイ、ヤマザクラなどの林(今ノ山山頂の北西部林道わき)。



今ノ山のスタジイの巨樹

樹高約25m、胸高直径約80cm、樹齢不祥(今ノ山山頂北西部林道わき)。

2. 貝ヶ森の植生

貝ヶ森(454.6m)は、三原村を囲む北部山地の中心で、山頂に三等三角点がある。植生の大部分は、スギ・ヒノキ植林であるが、一部にシイ・カシ萌芽林が分布する。

貝ヶ森の山頂付近は、一部シイ、カシの残存林がある。スタジイ、ツブラジイの高木に、コバンモチ、モッコク、タイミンタチバナ、ゴンズイ、タブノキなどが混生し、テレビ塔のある山頂近くまでの林道の沿線には、アオハダ、コバノガマズミ、ミミズバイ、モミジイチゴ、クマイチゴなど

が見られる。

筆者は、学校（黒潮福祉看護専門学校）の自室の窓から毎日この山を眺望している。雨に煙る紫の山なみ、暮れなんとする山ひだにかかる薄雲のベールなど、四季折々、日々刻々の光や影、色調など貝ヶ森の山容の移り変わりを楽しむことができる。（但し、中村市有岡側からの眺望である）

3. 伊与野川の周辺植生

村西部の下切地区を源として西流する伊与野川の周辺の植生は、川に沿った水田の雑草群落や低山地のスギ・ヒノキ植林及びシイ・カシ萌芽林によっておおわれている。ツブラジイ、バリバリノキ、ホソバタブ、アラカシ、シリブカガシなどの林床には、オオカグマ、キジノオシダ、カナワラビ、ハチジョウカグマなどのシダ類をはじめ、稀少種の草本類が出現する。

水田やその周辺、及び棚田の休耕田や低湿地には、伊与野川周辺地域に限らず、稀少種の生育が確認されている。

4. 植物相の概況

三原村に自生している植物種については、これまでの記録や最近の土佐植物研究会による調査等で明らかになってきている。さきに発表された高知県植物レッドリスト掲載種について見ても、三原村に於て相当数の植物種の分布が確認されている。例えば、IA類（CR）にランクされている種は、タニヘゴ、サワオグルマ、キエビネなど17種、IB類（EN）種は、スジヒトツバ、ヒメノボタン、イヌセンブリ、フナバラソウなど13種、II類（VU）種は、トラノオスズカケ、ユキモチソウ、ムギランなど8種、準絶滅危惧種（VT）種は、コモウセンゴケ、ミズネコノオ、チャボホトトギスなど11種となっている。（田城松幸、2000）これらの種の中には、古くから人びとと里山での生活を共にして生き続けてきた種も多い。

三原村の植物的自然の現況は、前述したように植物分布にとってまだかなり良好な環境が維持されていると考えられる。しかしながら、これからの人びとの生活形態の変化や、集落維持のための変革など、そのままでは少なからず影響を受けるであろうことが懸念される。

5. 植物的自然の保護

植物的自然の保護は、環境保全の原点であり、単にそこに生息する稀少植物種を保護するのみでなく、その生育環境全体が保全されることによって、私達人間の生活にとっても、健康で安全な生活環境を永く維持することができるという点を最

重要視していかなければならない。そして、これまでの人間最優先をあらため、急激な環境の変化を避け、地域ぐるみの保護策をとることに理解と協力をすることが一番であると思う。

おわりに、今回「三原村の植生と植物相」を起稿するに当たり、日頃同地の植物について観察され、多数植物種の写真を撮影されている岡村愛子氏（三原村上下長谷）より、貴重な写真を提供していただいた。また、土佐植物研究会会員の田城松幸氏（大方町浮鞭）には、高知県版レッドリスト三原自生種一覧（2000年7月現在）を作成していただき、その一部を掲載した。ここに両氏に対し深く感謝の意を表する。

ツルニンジン（キキョウ科）

日かげにはえるつる性の植物で、切り口からべとべとした乳液がでる。3 cmほどの花を下向きにつける。花の中は、紫褐色の斑点がある。花期は8月－10月、日本全土に分布する。



ツルニンジン（キキョウ科）写真提供：岡村愛子氏

カキラン（ラン科）

花の色がカキの実の色をしている。低湿地にはえる多年草で、高さ約30cm－50cm、唇弁の内側に紅紫色の斑点がある。花期は6月－8月、日本全土に分布する。



カキラン（ラン科）写真提供：岡村愛子氏

キエビネ (ラン科)

低山地の林床に生える。エビネよりもやや大きい。かつて県内では多数自生していたが、乱獲のため最近激減している。花期は4月－5月、高知県版レッドリストCR種。



キエビネ (ラン科)

写真提供：岡村愛子氏

センブリ (リンドウ科)

古くから苦い薬草として知られている。千回振り出してもまだ苦いというのが和名の起源という。日当りのよい山の草地に生える。茎の長さ20cm、5弁の花を咲かせる。花期は9月－1月、日本全土に分布する。



センブリ (リンドウ科) 写真提供：岡村愛子氏

オドリコソウ (シソ科)

平地のやぶの中や、人家近くの草むらの中に生える。ピンクの花と白い花があり、西日本にはピンク系が多いとされている。花の形が笠をかぶって踊る踊り子を連想させるとして付けられた和名。茎を囲んで楽しそうな白い踊り子の花が並ぶ。花期4月－5月。日本全土に分布する。



オドリコソウ (シソ科) 写真提供：岡村愛子氏

参考文献

- 永田 芳男：春の野草 (1991) 山と溪谷社
 永田 芳男：夏の野草 (1991) 山と溪谷社
 永田 芳男：秋の野草 (1991) 山と溪谷社
 長田 武正：野草図鑑 (1985) 保育社
 山中 二男：特定植物群落調査報告書 (1978) 高知県
 澤良木庄一：西流四万十を探る (1988) 高知新聞社
 角川日本地名大辞典 (1986) 角川書店
 四国百山 (1987) 高知新聞社
 現存植生図、高知県、土佐中村 (1982) 環境庁

三原村の地形と地質

高知地学研究会 川澤 啓三

【地形】 中村と宿毛の間には、かつて中筋地溝帯とよばれた低地が開けている。その南側には標高500mぐらいの山並みが東西にのびて、その向こう側には周囲を山塊に囲まれた、^{来栖野}を中心とした三原村がある。地表を刻む川の流れは、その来栖野を中心に大部分は下ノ加江側の水系として東方へ流れ、一部は北西へ中筋川となり土佐湾へ、西方へ伊与野川となって宿毛湾へ下る。

これらの関係を分水界で示したのが第1図である。村境は、北限と南限は大略分水界に沿っているが、東限と西限は一致していない。

山塊を分ける時には、一辺1kmの升目を設けて、その中の最高位と最低位の標高差を起伏量と呼び、この値が大きいほど山は険しいことになる。この考え方で村内の山の険しさを表すと第2図に示したような山地に分けられ、その多くは中起伏山地に属するものである。この起伏量はおよそ400mである。起伏量が100mぐらいになると、山はぐっとなだらかになり山裾のいわゆる山麓地に区分される。台地とよばれる地形は起伏量も数10mで山頂部分に平坦面がみられ、多くの場合河川の流れに沿った地域に認められる。台地より更に低い位置には、川の氾濫によって谷を埋積してできた低地が広がり、水田や畑作にと利用されている。

なお、第2図をみて判るように、下ノ加江川の上流域には、広い範囲にわたって台地・山麓地が分布しそこには赤色土が見られることは、その出来かたを思うとき興味深い。それは地質時代のある時期(20万～15万年前)に、高温で多湿な気候条件下で形成されたのではないかと考えられているからである。



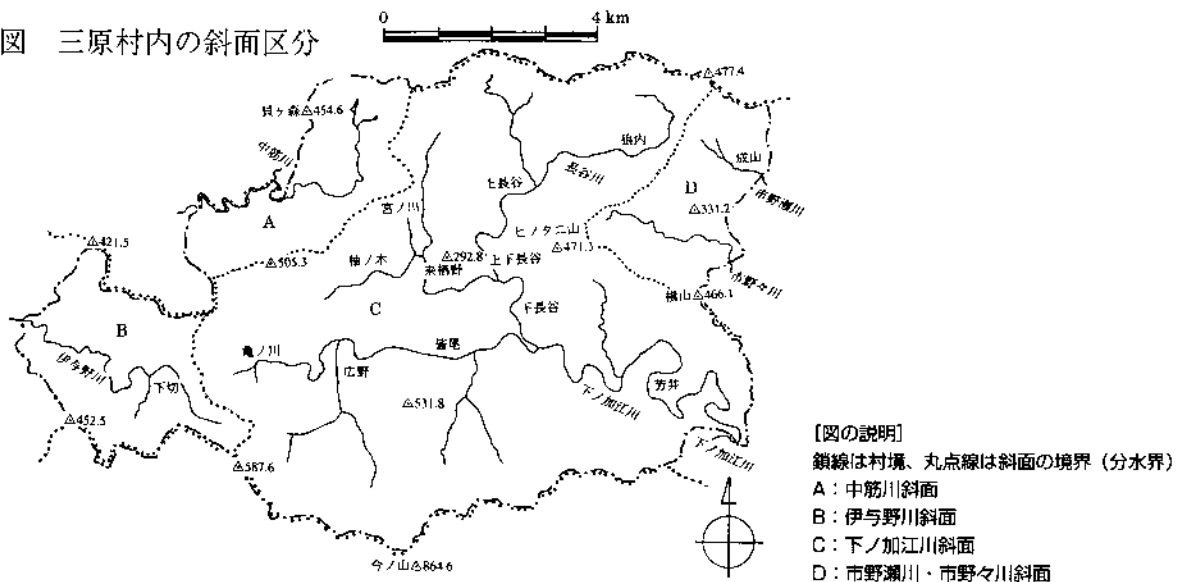
貝ヶ森

星ヶ岡団地
(開発工事中)

来栖野

写真：今ノ山越林道（大規模農道）+620m付近より北方を遠望

第1図 三原村内の斜面区分



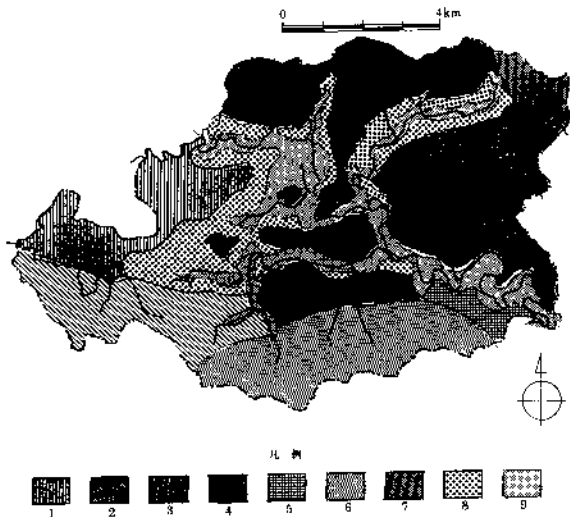
【地質】 上に述べてきたような地形が作られる大きな原因の一つには、その土地を構成する基盤の岩石の種類や並び方がある。そこで以下にこの事について考えてみよう。

仏像構造線（須崎の北方にある地質を境する断層のこと）より南側の広大な部分を占める地域を四万十帯といい、主に中生代および新生代の地層から出来ているが、中生代（主に白亜紀）の地層は、宿毛一中村を結ぶ東西方向の境界線（中筋構造線）を境に北側に分布し、四万十帯北帯とよび、新生代の地層は、これより南側に現れ四万十帯南帯とよんでいる。三原村は、地質学上この地帯に属している。

私達が生活しているこの四国の大地は、瀬戸内側より南側の太平洋側に向かって、次第に新しい

時代に形成された地層が順序よく東西方向に帯状に配列している。地質学的な過去の古さ（数千万年より昔のこと）の話をする場合に、海底に土砂が堆積して地層ができたというと、世間の人たちは大抵現在の海面が垂直方向に上下して、むかし海があったところが隆起して現在の陸地ができあがったように想像してしまう。ところが実際には谷川や道路側に見られる崖を見ると、地層は大抵垂直に近く立っていることが多い。それは丁度、将棋の駒を立てておいて、横から力を加えると正しく将棋倒し（ドミノ構造）であり、大陸と海洋の両地域の境界に位置する私たちが住んでいる日本列島は、このような出来かたで生まれたといわれている。

第2図 三原村の地形区分

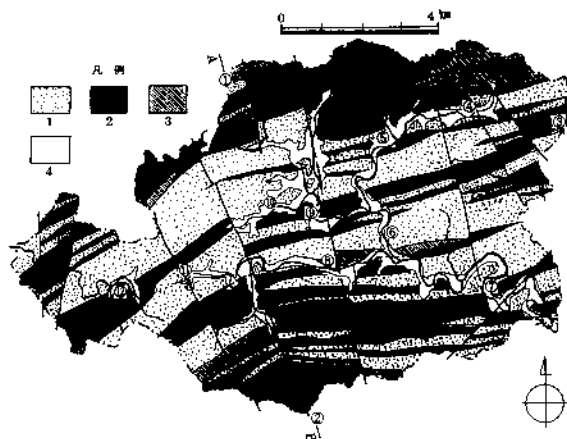


【凡例の説明】

- 1: 白皇山地 2: 尾畑山地 3: 貝ヶ森山地
 4: 横山地 5: 譚葉山地 6: 今ノ山地
 7: 中畑山地 8: 来栖野山麓地 9: 台地および低地
 高知県 (1974) を簡略化



第3図 三原村の地質略図



【凡例の説明】

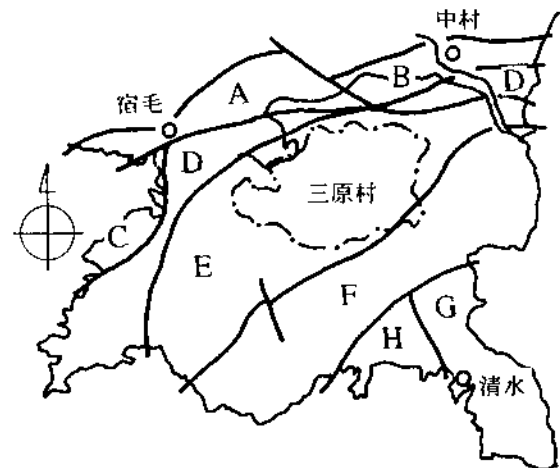
- 1: 砂岩山を主とする地層 2: 泥岩を主とする地層
 3: 砂岩・泥岩の互層 4: 礫・砂・泥の未固結層
 ①貝ヶ森 ②今ノ山 ③成山 ④狼内 ⑤上長谷 ⑥下長谷
 ⑦芳井 ⑧皆尾 ⑨来栖野 ⑩柚ノ木 ⑪龜ノ川 ⑫下切
 高知県 (1974) を簡略化

陸地より大洋に向かって、大陸棚（海岸から水深200mまで）から海溝（6000m以深）までの間には、大陸斜面とよばれる土砂が堆積する場所があるが、これを更に大陸斜面上部と同下部、その中間の前弧海盆に分けることがある。前弧とは海溝に向かって前方の意味で、弓なりの島は前方に向かって凸形をつくることに由来する。

三原村の地質系統は、第4図に示したように大部分は、弘見複合層といわれる地層に属している。高知県 (1974) では、大部分が来栖野層とされていたが、高知県 (1991) では、上述のように修正されている。複合層とは、陸地から供給された砂・泥などの碎屑物質からできている部分とメランジェとよばれる、強く破碎された基質の中に古い年代を示す玄武岩のような、火山岩塊や、放散虫チャートなどの海洋底起源物質が、ごちゃまぜになった堆積岩体を含む地層のことでメランジェとは、料理に使うメレンゲ（フランス語mélange）からきた用語である。このような複合層の存在は、大陸プレートの下に沈み込む海洋プレートとの境界付近で、典型的に形成される地質岩体と考えられている。

さて、三原村に広く分布している弘見複合層であるが、岩石は主に砂岩、それも非常に厚い砂岩層を主としており、間に黒色泥岩を挟んでいる。

第4図 幡多半島地域の地質系統



【図の説明】

- A: 平田層 B: 有岡層 C: 龍ヶ迫 D: 田ノ口層
 E: 弘見複合層 F: 来栖野層 G: 清水層 H: 三崎層

表 幡多半島地域の古第三系（時代の古さ単位は百万年前）

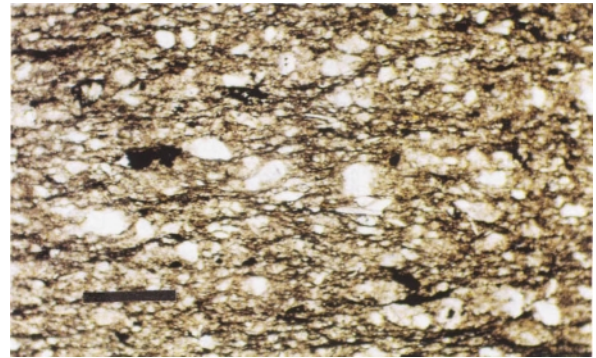
時代	堆積環境	大陸棚	大陸斜面上部	前弧海盆	大陸斜面下部	海溝
中新世 (23~5)						清水層
漸新世 (34~23)						?
始新世 (53~34)		平田層	弘見複合層	来栖野層		

村内では未確認であるが、都賀川には玄武岩の枕状溶岩や、赤色ないし緑色泥岩が知られており、久礼ノ川には石灰岩体もある。村内では、高低差が少ない地形のため、岩石の露出が少なく、詳細な地質調査が困難で、研究は他の地域に比べて遅れているのが現状である。

しかし、地層の変形の度合いや、岩石の種類・並び方などから、表に示したような場所で堆積したのではと推定されている。表中の堆積環境は、左から右へと沖合への度合いを示し、時代は下から上へと新しくなっている。数字は時代の古さを示し、53~34は5300万年前から3400万年前という意味で、今日の一般の方たちの生活感覚からは、ピンとこないかも知れないが、科学上の根拠に基づいたものである。

村の東南隅に僅かに現れている来栖野層は、上述のように高知県（1974）では、村内の全域に分布する地層として、来栖野層が提称されていたが、メランジェ相が含まれる部分を弘見複合層と定義付けをしたので、弘見複合層の南側に、これより少し時代の新しい来栖野層を南側に位置づけるのが良いので、1991年の地質図で修正された。

また、岩石の利用の面から土佐硯について少し述べておこう。三原村から書家の間で珍重されている硯石（土佐硯とか土佐端溪の名がある）があることは、かねて聞いていたので柚木にある硯石加工場を訪ねて原石をわけてもらい、岩石薄片にして偏光顕微鏡で観察してみた。岩石の名前は、黒色泥岩であるが、その粒の大きさは $25\mu\text{m}$ くらいで、泥の中では粒の粗いほうで、シルト岩とよべる部類に属する。石英や長石・雲母片・粘土鉱物からできている。黒色の原因は、多量に含まれる炭質物のかけらである。この硯が好評なのは‘墨のおりがよい’とか‘鋒錠（ホウボウ）がよい’とか表現されるが、要はこの硯石に含まれている微細な鉱物片のなせる技で、ある観光ガイドブックにあるような、銅粉を含んでいるようなものではなさそうである。黄鉄鉱の粒は含まれている。黄鉄鉱の化学組成は FeS_2 （硫化鉄）で、これは酸素の供給のわるい環境で、腐泥を生じるような場所のできたことの証拠になる。



土佐硯（黒色シルト岩）の顕微鏡写真
黒棒は $200\mu\text{m}$ （マイクロメートル）の長さを示す

参考資料

- ・高知県（1974）：土地分類基本調査「宿毛・土佐中村」5万分の1
- ・平・田代編（1980）：四万十帯の地質学と古生物学
- ・高知県（1991）：高知県温泉水脈推定基礎地質図20万分の1

三原村の昆虫

高知昆虫研究会 別府 隆守

三原村は、標高が平野部で約100m位、周囲を山に囲まれ盆地状の地形であり、中筋川沿いほぼ東西に走る中筋地溝帯と四万十川によって、他の域から、隔離された、四国内でも特殊な環境の場所であります。

残念ながら三原村の昆虫をまとめた報告は、無いようです。私は幸いにして、中筋ダムの調査、及び数年前から今ノ山の調査に参加し、若干の知見を得ることができたので、蛍湖周辺と、今ノ山の昆虫についてのべます。

1. 蛍湖周辺

中筋ダムによって出来た蛍湖の南面は殆ど三原村分です。山の木々が芽吹き始め、レンゲの花が咲き出すと、春の昆虫たちの活動がはじまります。蝶の仲間では、トラフシジミ、コツバメ、ツマキチョウ、モンシロチョウ、スジグロチョウ、キチョウ、ミヤマセセリなど、トンボの仲間では、源流部でムカシトンボ（NT）*¹、ダビトサナエ、平野部ではシオヤトンボ、ホソミオツネトンボ、ホソミイトトンボなどです。5月になると松林では、ハルゼミ（NT）*¹が鳴き出します。蝉は決して夏だけの昆虫ではありません。ガマズミの花にはハナカミキリの仲間が訪れています。チャイロヒメハナカミキ

りは普通標高400m以上の山地で見られますが、ここでは100m位の低い場所で見ることが出来ます。6月になると、谷の上流部では、空高くミナミヤンマ (NT)^{*1} が優雅に飛んでいるし、谷間の薄暗いところには、シコクトゲオトンボが静かに止まっています。ハルゼミに変わって、椎林では、ヒメハルゼミの大合唱が始まります。蛍湖では、名前の通り、ゲンジボタル、ヘイケボタルが、美しい湖面を照らし出してくれます。又薄暗い杉林などでは、ヒメボタルが光っています。このボタルは、同時明滅が一段と激しくゲンジやヘイケボタルとは違った美しさを見せてくれます。梅雨が明けると、夏本番となり、虫達も暑いのか、朝夕に活動し、暑い昼間は涼しい所で休んでいます。

9月になるとコオロギの鳴き声があちこちから聞こえてきます。ハラオカメコオロギ、ミツカドコオロギ、タンボコオロギ、ツツレサセコオロギ、エンマコオロギ、ハヤシノウマオイ等です。又村民憩の森のトンボ池では、アキアカネ、ナツアカネ、マユタテアカネ、ノシメトンボ、キトンボ (NT)^{*1} などのアカトンボの仲間や、タカネトンボ (NT)^{*1} 等が飛んでいます。

2. 今ノ山

この山は三原村と土佐清水市の境にあり、標高860mの山です。私はここ数年、高知県動物レッドデータの調査で何度か調査に訪れました。三原村側は殆どスギ、ヒノキの植林で、頂上部に僅かに自然林が残されています。この僅かに残された自然林で、近年5種の新しい種類が発見されました。そのうち2種は、バッタの仲間、アシズリササキリモドキ^{*3}と、クチキウマの1種であります。アシズリササキリモドキ^{*4}には、命名者としてBefuの名前が残りました。

カスミカメムシ^{*5} (メクラカメムシ) の1種には、学名に私の名前が使われています。ハナカメムシの1種は、雌しか見つかっていなくて、まだ新種の記載はされていません。

シリアゲモドキの1種は岡本啓氏の発見したもので、これも新種の記載はされていません。チョウの仲間では、キリシマミドリシジミ (VU)^{*2}、サツマシジミ、蛾の仲間では、夏場から秋口にかけて、ヤガ類を主体に、中大型の蛾の仲間が多く採集されました。それらは、暖地系の蛾が主で、南から海を越えて渡りをする蛾類が多く見つかったことが、この山の特徴の一つであります。キマエコノハ、ヒメアケビコノハ、ツキワクチバ、ネジロフトクチバ、キモンクチバ、ムラサキアシブトクチバ、オキナワアシブトクチバ、ヒロオビクロモンシタバ、オオシマカラスヨトウ、ナンカイカラスヨトウ、オウトウウスグロクチバ、ウスズミクチバ、ニジオビベニアツバ、マダラウスムラサキクチバ、ツクシカラスヨトウ、サンカククチバといった希少種も記録されています。ツキワクチバや、ムーアキシタクチバ等は、曇った蒸し暑い夜灯火に多数飛来します。ヤガ以外では、メングタスズメ、アジアホソバズメ、クロスズメ、オキナワクロホウジャク等のスズメガ類、カギバ科のオオギンモンカギバ、オオフトカギバ等はたくさん灯火に飛来します。シャクガ科のアカネエダシャクは、現在今ノ山が産地の北限であると思いますし、ベニホソガと言う南方系の小型種は四国で初めて採集されました。

バッタ目では、サヌキササキリモドキ、サツマヒメカマキリ、ヒメカマキリ、ヒナカマキリ、ヘリグロツユムシ、サトクダマキモドキ、ヤマクダマキモドキ、アリズカコオロギの1種、シコクフキバッタ、セトウチフキバッタ、ヒメクダマキモドキ、ハヤシノウマオイ、シブイロカヤキリモドキ、クチキコオロギ等が記録されています。

ゴキブリ目では、オオゴキブリ、モリチャバナゴキブリ、ヒメクロゴキブリ、ウスヒラタゴキブリ、クロテンチビゴキブリ、(NT)^{*1}等、甲虫目で注目するのは、トサヒメハナカミキリ、ベーツヒラタカミキリ (CR)^{*3} オオクボカミキリ (NT)^{*1}、ムネマダラトラカミキリ (NT)^{*1}、等の記録があります。

出かけてみると、意外に野鳥の数が少ないように感じると思います。

この理由は、三原村の耕地面積約350haの約87%を占める田の95%以上がほ場整理されていることに加え、人工林率が約76%と、高知県平均の約66%を大きく上回っていることからわかるように、三原村の環境に自然な部分が少ないせいではないかと思えます。

人工林率に関連することとして、最近よく森林の栄養分が河川から海に流されて来ることが大事だというようなことを耳にします。この中で代表的なものに窒素やリンなどがあります。これらは生物の重要な栄養源で、河川に流入すれば、植物プランクトンを育てます。この植物プランクトンが動物プランクトンを育て、さらに他の小さな生物を育て野鳥を始めとした大型の補食動物を育てています。

この栄養分の主な供給源は、死んだ動植物が細菌や真菌類によって分解されてできた腐敗物質ですが、スギやヒノキの人工林では広葉樹林ほど大量の落ち葉がないため、層が薄くなり栄養分の供給源には成り得ないと考えられます。

実際に、三原村から流れ出た下ノ加江川の河口付近では、もっと多くの野鳥が生息していてもよさそうですが、三原村内同様に野鳥の数はあまり多くありません。

もちろん、野鳥の生息数の少なさの原因にはいろいろな要因があると思いますが、三原村の人工林率の高さが関係しているのは間違いないのではないかと考えています。

つぎに、三原村ではどんな種類の野鳥を見ることができるとかについてですが、過去の観察記録が断片的なものしかないので記録をまとめるのに少々苦勞しましたが、なんとかそれらをつなぎ合わせて右のような表にまとめてみました。

表からわかるように、三原村では全体的な鳥の個体数が比較的少なく感じられる割には、生息が確認されたことのある鳥の種類は意外に多種多様です。特にタカやフクロウなどの猛禽類の種類数の多さには驚きました。このことから、三原村には野鳥の生息に適した部分の範囲が狭いために種類ごとの個体数は少ないながらも、多くの種類の野鳥が暮らせる多様で豊かな自然環境が部分的にはまだ残っていることがわかります。

21世紀の三原村が、多様な野鳥が数多く暮らしていけるような村になっていくのか、クマタカのように村を去っていく野鳥がさらに増えていって

しまうような村になっていくのかはわかりませんが、僕としては、たくさんの野生生物が暮らせる村のほうが美味しいお米もできそうだし絶対いいと思います。

表 三原村で生息が確認されたことのある野鳥

1	コウノトリ目	サギ科	ミンゴイ	夏鳥
2			白サギの仲間	旅鳥?
3			アオサギ	留鳥?
4	カモ目	カモ科	オオハクチョウ	迷鳥
5			オンドリ	冬鳥
6	タカ目	タカ科	ミサゴ	留鳥
7			トビ	留鳥
8			オオタカ	冬鳥
9			ツミ	冬鳥
10			ハイタカ	冬鳥
11			ノスリ	冬鳥
12			サシバ	夏鳥
13			クマタカ	絶滅?
14	キジ目	キジ科	ヤマドリ	留鳥
15			キジ	留鳥
16	ツル目	ツル科	ナベツル	冬鳥
17	ハト目	ハト科	キジバト	留鳥
18	カッコウ目	カッコウ科	ホトギス	夏鳥
19	フクロウ目	フクロウ科	アオバズク	夏鳥
20			フクロウ	留鳥
21	ヨタカ目	ヨタカ科	ヨタカ	夏鳥
22	アマツバメ目	アマツバメ科	アマツバメ	旅鳥
23	ブッポウソウ目	カワセミ科	ヤマセミ	留鳥
24			カワセミ	留鳥
25	キツツキ目	キツツキ科	アオゲラ	留鳥
26			コゲラ	留鳥
27	スズメ目	ヤイロチョウ科	ヤイロチョウ	夏鳥?
28		ツバメ目	ツバメ	夏鳥
29		セキレイ科	セキレイ	留鳥
30			セグロセキレイ	留鳥
31		ヒヨドリ科	ヒヨドリ	留鳥
32		モズ科	モズ	留鳥
33		ツグミ科	ルリビタキ	冬鳥
34			ジョウビタキ	冬鳥
35			アカハラ	冬鳥
36			シロハラ	冬鳥
37			ツグミ	冬鳥
38		ウグイス科	ウグイス	留鳥
39			センダイムシクイ	夏鳥?
40			セッカ	留鳥
41		ヒタキ科	オオルリ	夏鳥
42		カササギヒタキ科	サンコウチョウ	夏鳥
43		エナガ科	エナガ	留鳥
44		シジュウカラ科	ヤマガラ	留鳥
45			シジュウカラ	留鳥
46		メジロ科	メジロ	留鳥
47		ホオジロ科	ホオジロ	留鳥
48			アオジ	冬鳥
49		アトリ科	カワラヒワ	留鳥
50			ベニマシコ	冬鳥
51		ハタオリドリ科	スズメ	留鳥
52		カラス科	カケス	留鳥
53			カラスの仲間	留鳥



トビ



ジョウビタキ (左:雌 右:雄)



スズメ



オオルリ (雄)



ツグミ



ホオジロ (雄)



ミサゴ



とんでるミサゴ



キジバト



アオバズク



ツバメ



ミゾゴイ

植物アラカルト

元牧野植物園長 山脇 哲臣

私が三原村を訪れたのは終戦間もなく。農業試験場で害虫の係をしていて、当時被害が多かったメイ虫防除の指導のためであった。木炭バスが途中で故障して後から押したことを覚えている。

現在の三原から上佐清水市三崎へ越える大規模林道は整備拡幅中だが、それが完成した直後、旧営林局の職員の方々と今ノ山に登った。何処に展望台を建てるかの問題であった。今登ってみると、そこはレーダーのドームが建っていて、当時三崎半島が見えていた低木林は大きく成長して展望は全く利かない。

昔幡多郡一带の西部地域の森林は、薪炭林用、東部が材木用とおおまかにきまっていたようで、大規模造林がなされる以前は、今ノ山一带の巨大な山腹は、アカガシ、ウラジロガシ、スダジイなどを主とする広葉常緑林におわれモミ、トガが混生していた。

今それは、今ノ山山頂部や稜線に残されている保護樹帯にその面影が残っている。

今ノ山は地図上でみると、山頂部は土佐清水市に入っているが、社会通念としては三原村の山との印象が強いので、そうした書き方をする。



今ノ山山頂三角点 後ろにシロモジが見える

カンランは三原村の各所でみられるが、初めて今ノ山に登った時、営林局の職員や三原村の方々と、今ノ山の産地を教えてもらった。地上部は見当らなかったが地中の根茎のかたまりを掘った跡を見せてもらった。頂上から西へ、少しばかり降りた所で標高は700mばかり、冬は固く凍ると思う。こんな高い所の自生を仁淀村でもみた。

今ノ山への登山口は峠から南へ1キロ程降りた所の溪谷に沿ってあるが、最初登った時に道の中頃で、ヒメムカゴシダとオオフジシダをみた。ヒメムカゴシダは戦中に北川村で採り、ちょうど高知に来ておられた京大のシダ博士の田川基三氏の鑑定をうけた。田川氏の父君は、かつて高知県の郡長をしておられたとの事。



ヒメムカゴシダ



オオフジシダ

今ノ山の山頂付近は広くなだらかで、見通しの利かない密生した林があり、小道がたくさんあって知っている人でも迷うという。アカガシ・スダジイ・モミの林の中に、やや高地性のものとして、ヒメシヤラ、ミヤマシプレ、ツルシキミ、シロモジ、ニシノヤマタイミンガサ、チャボホトトギスなどがある。



チャボホトトギス



今ノ山山頂部 ヒメシャラ

峰越し林道から今ノ山へ登る途中、小さな谷のコケの中で、サカバワラビの一種とシソ科の一種を見つけた。シソ科のものは、私には記憶がなかったので村田源氏に送付したところコケトウバナ(四国未記録)だった。



コケトウバナ
大隅・屋久に産す

今ノ山の北斜面の溪谷沿いにはシダ植物が多い。シロヤマシダ、コクモウクジャクや、昔はニワトコやウツギの下枝のコケに混じって、オナガウラボシ型のものがあつたが、今では殆んど見当らない。この現象は東洋町野根でも同様である。

貝ヶ森454.5mは中筋の方からよく見える。山頂あたりに森林がこんもりあるので、上にテレビ塔が建ち、車道が出来た直後、車で登ったが、急傾斜へ敷いた砂利で滑って登れなかった。スダジイの森が残されている。展望は利かない。

中筋から三原へ入る道はいくつかあるが峠を越えて間近の所に小さな祠があり、その谷間にアミシダとキエビネが少からず自生していた。探してみたが祠そのものがどこにあつたか分らない。

スジヒトツバは村の西端二角あたりで見掛けたことがある。

土佐清水市はツバキの防風しょうがあるが三原村は昔屋敷林にサザンカが多かつた。ツバキより

サザンカの自生地が植物学上では興味がある。昔はコガタシと呼んで採油の大切な資源であつた。よい屋敷林は村の文化財として残してよいだろう。

三原村にはフジツツジが多い。路傍では刈込まれて崖にはりついている。高知県東部や徳島の南部では、それがモチツツジとなっている。

オオカグマも三原村あたり高知県の西南部には濃密に自生する。中村市あたりから東部に行くと急速に激減する。



道路傍の刈り込まれたフジツツジ

--*-*-* *-*-*-*-* *-*-*-*-* *-*-*-*-* *-*-*

〈シリーズ〉

鎮守の森 —その六十四—

元牧野植物園長 山脇 哲臣

天満宮社叢

中村市の長沢から、下長谷実崎線を登ってきて上長谷の道路側にある。地積は1haほど。こんもりしたスダジイを主にした社叢である。イヌマキ(多)林内に稚樹も多し、スギ、コバンノキ(幹奇形をなす一株あり)ナギ、スダジイ、ツクバネガシ(やや大)ヒトツバ、オオカグマ(多)ウラジロガシ、ヤマザクラ、ハゼノキ、センリョウ、ホラシノブ、ヤブミョウガ、アセビ、クチナシ、ムベなどを見る。村内ではよくこんもり茂つた美しい社叢である。



上長谷の天満宮

調査がすんで下の水田を見て驚いた。久しく水田除草剤のため姿を見なかったコナギが、水田からまけ出る程に繁殖しているではないか。恐らくはそれに伴う外の水田雑草もあるはずだ。この水田を水田雑草保護区としたらと思いついた程だった。

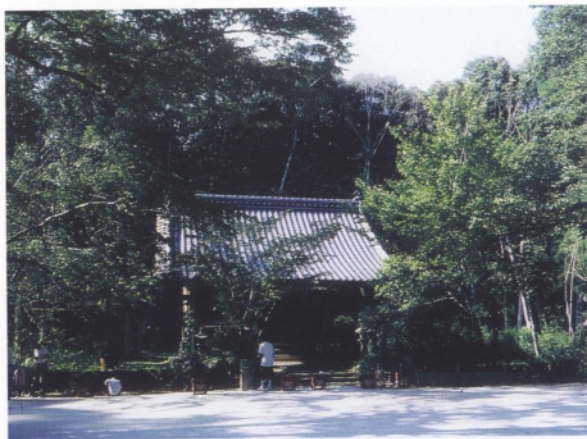


上長谷の水田のコナギ

五所神社（約1.5ha）

役場からすぐ北へ2 km程の所にある。旧社叢と思われる地域は新しく出来た二車線の、立派な道路によって二つに分けられ、それから西には広大な造成地がひらけている。そこから障害物がなくなって南に今ノ山とレーダーのドームがよく見える。

社叢にイチイガシの巨木が2本あり、1本は（径1.2m）他にイスノキ、エノキ、ケヤキ、メダケ、シャガ、スタジイ、ヤマビワ、イズセンリョウ、カンザブロウノキ、サツマルリミノキ（多）などを見た。



五所神社社叢



サツマルリミノキ

土佐の自然No 83号の訂正のお知らせ

「横谷山の昆虫と洞窟動物」		
	誤	正
10P	左下から8行目 ジュウチホシ	ジュウシチホシ
	左下から7行目 コトラハナムグリ	削除
	左下から6行目 ヒメトラフコガネ	ヒメトラハナムグリ
	左下から5行目 セダカ○ヤハズカミキリ	セダカコブヤハズカミキリ
砥知町の野鳥		
	誤	正
12P 表1	メジロ科 ホオジロ	メジロ

編集委員

川澤啓三・濱田 康・山脇哲臣・国澤鎮雄

＝「R100」この冊子は古紙配合率100%の再生紙を使用しています。＝